

ルターーの聖餐理解

——ルターーによる聖餐設定辞の意味*

ヨアヒム・リンググレーベン

「精神生活の特定の場所で基本的に新しい認識が人間の意識に登場するときいつでも、そもそも現実とはな
んであるのかという問いが新たに検証され、答えられなければならない。……例えば近代初期に三つの見かけ上
は全く別々の、しかし内的には関連したできごとが時間的に互いに近接して起こっていることを知れば、われわ
れはそのつながりを考えないわけにはいかない。すなわち、コロンブスの最初のアメリカ航海、聖餐においては
パンがキリストのからだであるのか、からだを意味するのからだというルターーとツヴィングリの間論争、そしてコ
ペルニクスの発見の三つである」。

W・ハイゼンベルクほどの人物が、「いったい現実とはなにか。最初と最後の物事についての哲学的（考察）」
というタイトルの下で、このような見解を述べたのである。⁽¹⁾

ここでは現代の権威ある物理学者の一人が、宗教改革的な聖餐神学を、現実理解にとって決定的なテーマの一
つとして認めたわけである。その際、神の隠された働きと見える世界との関係規定なしには、現実には十分には規

定され得ないという洞察が全体を導いている。

私の考察はこの示唆に従うべきだと考えている。この際、ルター後期の『キリストの聖餐について。信仰告白』^②（一五二八年）という著作を特に取り上げることになるのだが、それによって、そもそも現実との関係というを取り出す解釈が試みられることになる。設定辞の意味を問うという一見かけ離れたように見える、サクラメント神学上の特定問題において実際は、そもそも現実の理解全体がテーマとなるのだということが明らかになるであろう。

もちろんこのような試みには、ルター派の教えの、伝統的な拒否や反論の強力な戦線が張られることになる。神学そのものや、哲学の歴史からもわれわれに見えてくるところである。

例えば哲学者デイルタイは軽蔑的にこう特筆した。「ルターの聖餐論は魔術的な表象の残滓を残しているのだが、キリスト論的幻想を呼び起こし、キリストのからだの遍在という恐るべき教えを成立させた」と論じたのである。これによってデイルタイは教派間の神学論争の古くからの一問題を取り上げたに過ぎない^④。疑似カトリック的というこうした評価はほかにも繰り返し登場してくる。トレルチにとっては、ルターの聖餐論は全く「教皇派的」だった。もつともヘーゲルはほかの見方をしていたのだが、私は今日はこれに立ち入ることはできない。

偉大な、自由主義的な教理史家A・ハルナックはデイルタイやトレルチと似たような判断をし、「最高度の高さのスコラ主義的不合理の上に立つ、キリストのからだの遍在についての驚くべき思弁^③」と語った。

このような恐るべき批判は、固有の時代制約的な世界観の自明な優越性が、その前提を提示する必要がいささかもないものとされるからこそ、述べられ得たのである。現実理解そのものの存在論的問いに立ち入ることがないのとは言わずもがなのことである。

もしこのような決定的な先入観が既に神学の代弁者たちにおいて見られるとすれば、キリスト者である信徒からはいったいなが期待されるだろうか。たとえばポール・テイリツヒのような神学の大教師が「キリストのからだの遍在についての、ルターの論理的に不可能な教え⁶⁾」という言い方を括弧付きで強調して、象徴論的に軟化された聖餐理解を代表するのであれば、われわれの牧師たちはこの問題についてどのように判断するべきなのだろうか。

さて、ルターの論理についてすぐに語ることにしよう。ともかく私としては、こうした厳しい批判に気落ちさせられることのないよう心を定め、ルターの神学的批判者たちに対して、ハイゼンベルクに勇気づけられて、自らの考えや理解を求めることとする。先に挙げた論文の序には、「量子論とは、人がこの本質を完全な明瞭さで理解し得たとしながら、同時に、それについてはただ像や比喩において語りうるだけであるということのすばらしい実例である⁷⁾」と言っているからである。これがルターの聖餐理解、現実理解にどのように適合するかを、以下に述べることにしたい。

I 三つの外的な観察

1. ルターの聖餐論の一般的な特徴は、設定辞の理解において、「このパンが私のからだである」というこの文章にある「矛盾」を和らげることなく保ち続ける点にある。ルターは矛盾を取り除こうとする合理主義的な理論を断念する。ローマの実質変化論や、「である」を「意味する」で置き換えて、「(心理学的に)「想起の食事」としてしまふ改革派的(ツヴィングリの)解釈などである。こうした両理論は「である」ということばの緊張を

軽減するか、解消してしまふ。ルターはこの緊張を保つことによつて、この単純なことばに留まるばかりでなく、ここにこそ神学的な手がかりがあるはずであつて、以下に明らかにするつもりだが、これは正確には彼の現実理解と関係することを示す。からだとパンとの一致は、明らかにルターによつて、両者の矛盾を通してのみ把握されるものなのである。この矛盾を明確に保つときのみ、物素とキリストとのどのような一致がここで語られているのかを、人はそもそも理解することができるとも言いたげなのである。

2 ルターはサクラメントの秘義を、全く非合理的なものとは考えていない。むしろその逆である。なるほど多くの箇所では彼は、ここでは理性は捕らえられていなくてはならないと言っている。しかし同時に注目すべきは、彼自身が常に繰り返し返して、人間の経験から出る合理的な類推を働かせていることである。人間の経験というもの、よく注目するならば、キリストの遍在や、それにもかかわらずのその日々の現実と同様に、秘義に満ちたものである、というのである。このように少なくともある程度まで、ここでは「考えるに値する」という思いをもち続けることができるであらう。両者はどのように関わることができるのだろうか。ルターは結局のところパンとからだとの一致を考えて、「これは聖書に反しない。いや、理性にすら反しない。正しい論理にも反しない。むしろ、理性にとつて聖書や理性や論理に反しているように思えるだけだ」と言う。つまり、確かにそうなのだ、今のうちだけ、地上の生の、罪に堕ちた理性という条件の下では反合理的に見えるだけであつて、眞実はこれこそが眞の論理に適うのである、というわけである。

3 まさにこれと関連して次のような特筆すべきことがある。すなわち、設定辞の合理性を示すためにルターが常に繰り返し返して、現実の言語の合理性を指し示していることである。この現実の言語にルターは、形式的な論理や抽象的な形而上学のメタ言語的構造以上に、現実開示的な力があると思つている。それゆえアリストテレス

の哲学に対して、文法や修辭学（クインティラン）に注目する。ルターはここで、いかなる思考も言語から離れて確立されないことを示す。彼は、聖書の言語使用において神学的思考を立てるとき、正確にこの原則に従う。これは形式的聖書主義（字句拘泥）とは全く異なり、むしろ具体的に言語的に考えられているのである。言語を前提とすることなしには、いかなる思考もないのである。以下の論述を追う際には、この三つの形式上の観察を常に心に留めておいていただきたいとお願ひするものである。

Ⅱ サクラメント的なことば

サクラメント論の神学的基礎はキリストご自身である。なぜならキリスト教的にはルターにとつて——絶対的に見て——唯一のサクラメントしか存在しないからである。それはその位格における神人にほかならない。「聖書は唯一のサクラメントをもつ。すなわち、主キリストご自身である」⁽¹⁰⁾。

人となられたことばとしてのキリストの存在がサクラメント的に把握されるべきであるならば、このサクラメントはことばにおいて自己を伝達する。まさに「ことば」が多くのことばにおいて自己を伝達するのである。キリストのことばと行為とにおいて永遠のことばの、人間の言語への「Transsubstantiation」が起る⁽¹¹⁾。キリストご自身がことばにおいて到来して、ことばと共に神ご自身であられることによつて、ことばが自らをわれわれに伝達する。神のことばがわれわれのために、われわれの許にあるならば、言語はサクラメントとなる。すなわち、神のことばが神の言語のサクラメントとなり、言語的なサクラメントとなるのである。

1 ことばとしてのサクラメント

どのサクラメントも（設定の）ことばと（感覚できる）しるしとが、救いに満ちた形で共に存在するということよって特徴づけられているのであれば、より正確に考察すれば、それは、キリストのことばそれ自体が既にサクラメント的な位置をもっているという点に根拠づけられているということである。「キリストのそれらのことばがサクラメントなのであって、それを通して神がわれわれの救いを働かれる」⁽¹³⁾のである。神ご自身のことばとしてのキリストのことばの「内に」のみ、真のいのちが存在する。

キリストのことばにサクラメント的な性格が帰せられるということは、逆に、サクラメントというものはみことばによつて設定されたものとして、あるべきものになる、ということになる。これは本来 *creatura verbi*（みことばの被造物）である。「神のことは以上に、地上において聖なるものはない。サクラメント自体もまた、神のことばによつて造られ、祝福され、聖とされているからである」⁽¹⁴⁾。サクラメントの神的根拠は、「サクラメントよりも高貴な、すべてのものを聖とする」⁽¹⁵⁾みことばである。この違いを有効であり続けさせるためにも、教会においては宣教のことば「と」サクラメントが存在するのである。この「と」は言わば、単なる並列を意味するのではなく、ことばとサクラメントが互いに、サクラメント的なことばとして、またことばによるサクラメントとして登場するということである。このような相呼応する関係においてサクラメントの言語性も、ことばの身体的、外的特性も（形式的に）現れてくる。人間的などの言葉も既に感覚性と意味との二一性をそれ自体においてもっているからである。その限りにおいてことばとサクラメントの二一性はそもそもことばの言語的な本性をもっているであつて、これは人となられた、ご自身お語りになることばにおいて完全に現れたということになる。

これまで語られたことによつて明らかとなるのは、聞くことばと見えることばとの区別、あるいは、ことば

(sermo)と感覚的なしるし(sacramentum)との一義的な順序は表面的なものに過ぎないということである。サクラメントそれ自体はまさにことばとして感覚的で見えるものであり、すなわち、ことばと分ちがたく結びついており、ことばがサクラメントを基礎付け、これに伴い、その内において見えるものとなっているのである。サクラメントは *verbum visibile* 見えることばとしてのみ⁽¹⁶⁾、見えるのである。

サクラメントが見えることばであれば、それは、(キリストの、あるいは神の)ことば自体が聴こえるサクラメントである、ということにのみ根拠づけられる。それだからルターにとっては、正しく聞くということは霊的、サクラメント的に聞き尽くすということであった。「みことばは信じること、霊的にも身体的にも食することを要求する⁽¹⁷⁾」。こうしてことばが、われわれの信仰を呼び起こすために神が「一人の人を通して」われわれに与える、外的な、知覚可能な「しるし」⁽¹⁸⁾であるならば、逆に、「サクラメントは神の外的なことば」であり、信仰を強める「神のみこころによる感覚的なしるし」⁽¹⁹⁾である。こう要約されて続く。「われわれがはつきりと見るとおり、神はその聖なることばと、それと同じであり、ご自身のことばのしるしもしくは封印であるサクラメントをもってする以外には、われわれと関わりをおもちにならない⁽²⁰⁾」。ことばとサクラメントにおいては本来同一のことが問題なのである。「説教の中にあるものが、まさにサクラメントの中にあり、また逆でもある⁽²¹⁾」。

2 ことばにおけるサクラメント (聖餐設定辞)

主の食卓を設定するキリストの設定辞はひとつの(終末論的な)言語のできごと——いや、言語のできごとそのものであって、それゆえに説教の関連の中に位置する。その使徒的な伝承(Paradosis)は主の伝承に基礎づけられている(一コリント二一章二三)。「あなたがたのため」(同二四、マタイ一六章二八も参照)において主

は、「引き渡される」(二三)、自らが敵に引き渡されることを、人間の救いのために自らを与えることと受け止めておられる(ローマ三章二五)。

ルターにおいてはこの新約聖書の関連が二つの言語神学的な文章によって組織的にとらえられている。1 人となられたことばであるキリストはそのことば自体において到来し、自らを現臨させる。2 み子のことばにおいて神がその本質と力とにおいて現臨する、ということである。これを今設定辞に関して展開してみよう。

設定辞においては、「それが全福音の要約である」⁽²²⁾がゆえに、キリスト教的に理解されるならば、ここにすべてが掛かっている。洗礼の場合と同様に、設定辞は神ご自身の設定にさかのぼるのであって、それゆえに決定的なものである。⁽²³⁾基礎づける神のことばなしにはそもそもサクラメントは無であるのだから、ことばはサクラメントにおいて大きな意味をもっている。「それゆえこれらのことばには、サクラメントそのもの以上に大きな意味がある」⁽²⁴⁾。信仰を呼び起こすこのことばを「聴こえるサクラメント」としてとらえるならば、そのようなサクラメントとしてのことばと、その分与 (distribution) とは相共に唯一つのことである、と言わねばならない。なぜならことばは——伝達的能力と内的な普遍性のゆえに——それ自体既に分与であるからである。「聖餐においては飲食のゆえではなく、ことばのゆえに、罪の赦しがある。それによってキリストはそのように獲得された赦しをわれわれの間に分与し『これはあなたがたのために与える私のからだである』と言われるのである」⁽²⁵⁾。

設定辞を基礎づける意味は全く、それが——キリストの口において——神ご自身のことばであるという点に懸かっている。それゆえ神学的にはこうとらえることになる。すなわち「力点、重要な部分は神のことばと秩序、あるいは命令である」⁽²⁶⁾。設定に際してキリストは神ご自身のように行動なさる。「キリストはパンと葡萄酒を取り、ご自身が語られることばをもってそれをご自身のからだと血とし、これを飲食するよう弟子たちにお与え

になる⁽²⁷⁾。初めにおけるロゴスのことばは、自らにおいて創造者としての力をもつ。「『これは私のからだである』などという本文は、人間の言葉ではなく、ご自身の口からそのような文字と言葉をもって語られ、定められた、神ご自身のことばである⁽²⁸⁾」。み子の口を通しての創造者ご自身のことばとして、「これは『at work』(事実となることば)であって、これをキリストが初めてお語りになり、決して偽ることのないものである。ご自身で『取って食せ。これは私のからだである』などと言われるからである。まさしく、創世記一章において、『日と月があれ』と言われたら、日と月があって、そこには偽りがなかったように、ことばが発せられるとおり、創造が起った。詩編三三編九⁽²⁹⁾」。このようにキリストご自身がそのことばにおいて現臨しておられて、そのことばは全能であるならば、神の全能の現臨が特別に「あなたのために」ここに存在しようとしてくださることが成就されているのである。「神は至る所におられる。しかし神は、あなたが至る所で神を探し求めることをお望みにならず、みことばのあるところに、神を求め、神を正しく手にするようと望んでおられる⁽³⁰⁾」。サクラメントにおいては身体的現臨こそが歌われるべきなのである。「彼はことばをもつてそこに現臨なさる。そのからだと血とをことばと結びつけて、パンと葡萄酒のうちに身体的に受け取るようになさるのである⁽³¹⁾」。「あなたのためにここにあり」ということは、「あなたがたのために」ということがサクラメントにおいて身体的に自分のものとなるということである。遍在がみことばの現臨を含むように、サクラメントにおけるみことばの現臨は、キリストの遍在の、特別な(救済論的な Promie の)、身体的な現臨のあり方なのである。

キリストのことばの働きは、そこで響く神の語りの力によって、「performativ 働く」のである。「なぜなら、キリストが『これは私のからだである』と語られるやいなや、そこにそのおことばのゆえに、聖霊の力によってキリストのからだがあるのである。そのことばがなければ、それは単なるパンである。だがそこにみことばが来

るので、それが響くとおりのものをもたらすのである⁽³²⁾。神の創造的なみことばの働きが起こるとき、サクラメントは働くことばであり、あるいは「verbum actuale 活動することば」と言いうるであろう。感覚的に与えられたサクラメントは、働く神のことば以外のなものでもない。「福音は……信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」(ローマ一章一六)。このように、神学的には神ご自身のことばこそが本来のサクラメントでありつづける。「地上には神のことば以上に大きな聖なるものはない⁽³³⁾」からである。

3 EST (である) とこうじつ

われわれに対するキリストの救いの働きは語りによって起こる行為であり、「ことばによって以外にはわれわれのところに来ることができない⁽³⁴⁾」のであるから、Ansichsein それ自体の存在としてのこの最高の宝は、Fürunssein われわれのための存在に変えられねばならない。まさにこのことがサクラメント的なみことばにおいて起こっているのである。「それはみことばの内へと収められ、われわれに差し出される⁽³⁵⁾」。みことばの内へと収められるということはサクラメントにおいては、みことばを通して、またみことばにおいてのキリストご自身の現臨化にほかならない。「主キリストの真のからだと血とがパンと葡萄酒において、またパンと葡萄酒の下に、キリストのことばによって(現臨するのである)⁽³⁶⁾」。こうしてキリストはここでそのことばにおいてご自身を与え、すべてをお与えになる。「主は自らをみことばの内⁽³⁷⁾に収め、みことばによってまた自らをパンの内にお収めになる⁽³⁸⁾」のである。これはサクラメントそのものにとつて決定的なことである。ルターがここでも強い意味で引用するアウグステイヌスの定式に従えば、「みことばが物素に到来して、サクラメントとなる⁽³⁸⁾」のである。

みことばが物素に到来して、みことばの内⁽³⁷⁾に収められるというこの、組織的な関連は「サクラメントとな

る」ということに關して、もつと正確にとらえられうるであろうか。先ず明らかなのは、「到来する」が「(みことばの内に) 収められる」と解釈されることによつて、「(サクラメントと) なる」ということが決定的に、「變化」などとしてとらえられるべきではないということである。⁽³⁹⁾むしろみことばが自らに物素を、「ことば—からだ」として受け入れ、物素と共に——「變化することなく、分たれることなく」——サクラメントという「二つであつて一である」實在を形成するのである。創造的なみことばが物素に到来することによつて、みことばは物素を自らのものとし、言語的には自らの内に aufheben 止揚し、これと共にサクラメントとなるのである。設定辞は決してただ外的に伴っている語り(例えば説明的な言葉のような)ではなくて、キリストの口で語られた創造者のことばとして、被造的で、自然的な物素を包み überformen、物素を脇に押しやることなく、キリストご自身のものであつて、物素はみことばに従属する一つの要素となるという形での、新しい「みことばの現実」の中へと入れる。創造された世界の本来の言語性は——罪により歪められ、失われたものの——原則として代理的に、まず、パン、葡萄酒という宇宙的な物素に再び結び合わされて、それ自体が永遠のみことばの感覺的な現在となり、「彼のからだ」となり、こうして同時にすべての造られたものの究極のことば化を予期させることになり、終わりの時には造られた世界はそのように変容させられるであろう。サクラメントは身体的なみことばであり、感覺的に響くことばであるが、(聞かれうるサクラメントとしての)終末論的なことばの、隠された形での予表であつて、(目に見えることばとしての)サクラメントの内に身体的に存在している。

これまで述べてきたことを背景にすれば、ルターが設定辞の EUSJ (である) に誤りなく固く立っていることが把握される。必然的にこういうテーゼが結果してくる。すなわち、ルターにとつてここで問題なのは、(聖書的な)神のことばへの、一般的な(それもここでは多分ある一つの重要な点で)終止変わらぬ眞実を貫くという

ことでも、文字信仰という意味での、ルターの見掛け上の聖書主義でも、また単なるサクラメント神学的な、あるいは、キリスト論的な問いでもなかったということである。ルターにとつてマルブルクでの論争において、特にツヴィングリとの間に、基本的な問題とされたのは、そもそも神ご自身のことばというようなものが存在するのか、ということであった。彼がestということばの意味について一歩も譲らずに固執したのは、言語的な、また言語神学的な性質のものだった。このESTそのものが真に神のことばであつて、神のことばを意味する(significat)だけではない、と言われているのである。ルターにとつてはこの神学的状況において、新約聖書のこのestがキリストのサクラメント設定の決定的なことばとして、まさに神のことばである、ということだった。このことばと共に言語的に明瞭に、こうした仕方でも神の固有なことばが存在し、神のことばがわれわれの言語の中で存在している(est)ということがことばとなつていっているわけである。これに対してsignificatは神ご自身のことばを、人間的に整えられた解釈学の、二次的で主観的で、(ひたすら無限に考察を続ける)暫定的な解釈の産物としていっている。つまり、神のことばであることを解消しているのである。ルターはestに固執することによつて、このことばを神のことばとして、言語的に存続させようと欲していた。彼にとつては以下のことが当然これと同じ意味をもつことになる。すなわち、ことばそのものであるキリストがそこにおられることを知ることができるといふことである。改革派の人々に対する彼の論争は、神のことばの脱言語化に対するものであり、また同時に、自然的言語が偽りのあり得ないものとなることを認めることでもあつた。

4 ESTにおける新しい現実

「である」とはつきり示している設定辞の、ことばの意味にルターが固執していることにおいて、神学的にす

べてのことに先立って注目すべきは、キリストのからだと自然的な物素との間に直接的に存在する矛盾を彼が、そのようなものとして確認した上で、それを合理主義的な理論によって——「実質変化」という形而上的理論による（客観的に）にせよ、「significat」という解釈的な理論による（主観的に）にせよ——説明して取り去ってしまおうと試みていないという点である。そこにおける彼の態度は決定的に言語的であって、これを人は弁証法的とすら言いうるであろう。彼が生きた言語使用を引き合いに出して、形式的な「である」解釈の抽象的な要請に反対して、「これは聖書に反しない。いや理性にも、正しい論理にも反しない」と主張しているからである。神学的理性が言語から独立しようと試み、論理が誤った先験的な仕方で（聖書の）自然的な言語を、論理が自らをその言語の前提とすることによって、規制しようとするならば、こういう見せ掛けがそのときのみ起こってくるのである。

これに対して設定辞は、からだとパンとを創造的関連で語ることによって、*synekdoche* 提喩⁽⁴²⁾という修辭的なイメージを用いている。ここで明らかになるのは、ルターにとって「みことばの内に収められ」ということは神学的に、「二つの別々のものが一つのものになれば、二つのものが一つの語りの内に収められる」ということを意味することである。この「である」という同一化する*est*において、新しい現実が生起しているのである。「なぜなら実際に、このような別々のものがこうして一つとなって、このような合一によって真に新しいものとなるからである」⁽⁴⁴⁾。ルターによればこうして一つとなったものが重要なのであって、別々でありながら一つであることが成り立つ、すなわち、一つとなったものの矛盾と見えるような違い（パンとからだ）を理論によって排除してしまうことなしに、なのである。問題となっているのは「二つの、別々のものが一つになること」⁽⁴⁵⁾であり、このことによって「たとえそれぞれがそのままであっても、それは一つのものと呼ばれ、特に一つのものな

のである⁽⁴⁶⁾。パンはパンであり続け、なにかほかのものとなりはしないし、からだも同様である。二つのものがこのように言語的に結び合わされると言うことは、神の創造的な行為における神の真実であり、キリストがご自身のからだと物素とを同一化することは、まさに終末論的一致にほかならない。形式論理的な分離に対しては、ハマンが後にカントと哲学に対して異議を唱えたように、理性と言語、先験と後験、(言語の) 感覚と霊のように、神が一つに合わせたものを区別しているということが妥当するであろう(マルコー○章九参照)。

からだと物素の創造的な結び合わせの語りについてのルターの理解は聖書的なメタファーの終末論的な見方に根付いている。そのメタファーは決して、「転用された」、本来でない状態を言い表すものではなくて、本来の意味で妥当するものなのである。この終末論的な言語イメージにおいてルターは、(聖書における) 神の語り、もしくはことは行為全体の本来のリズムを認識⁽⁴⁷⁾し、それに即してこれは、キリストが終末論的に新しいものであることを事実示している。「ここでは est という単語は「ツヴェイングリの場合のように」解釈遊びをしてはならないのである。なぜならキリストは花を意味するのではなく、花そのものでありながら、しかも自然的な花とは違うものだからである⁽⁴⁸⁾。「そのものについて、そのような語りにおいては人は、それがなんであり、なんでないか、それがなにを意味するかを語り、その新しいものについて新しいことばを作る⁽⁴⁹⁾」ということが言語的に妥当するように、神学的には、「こうしてももちろん聖餐においては、キリストの命令、指示、働きのゆえにそのからだが存在しなければならぬ⁽⁵⁰⁾」。(メタファーの) 終末論的な新しい規定と創造的なことばの行為との関連において、estはその根本的な神学的意味をもつわけである。

これに従えば、聖餐におけるキリストの身体的な現臨はその創造的な語りからして把握されるべきである。これによってキリストはご自身の身体性を終末論的に新しく規定している。なぜならキリストの設定辞はそれと共

に、「『からだ』ということばを新しくして、キリストの自然のからだを比喩であるかのようにする、真の新しいからだと呼ぶ」に至らせているからである。キリストのからだにおいて範例的に、すべての被造物の終末論的な価値転換、もしくは改造が起こっている。キリストの自然のからだは、そこにおいてその終末論的な前提される、その終末論的からだの「比喩」に過ぎず、すなわち、その地上的先取り、先駆けに過ぎない。その変容した、サクラメントにおいて現臨するからだこそが、その造られたからだの真の「本質」なのである。「である」という聖餐のことばにおいて実現する、終末論的で、神的な言語のできごとがこのサクラメントをサクラメントたらしめている。ルターはここで、ご自身のからだについてのキリストの語りをこう理解する。すなわち、創造的な設定辞のことばによって、キリストの自然的なからだとは終末論的なからだとは結び合わされて、別々でありながら同時に相互に関わるものとなるというのである。つまり、*est*において、キリストのからだはご自身とは別のものである。「『からだ』ということばは、古い意味においてキリストの自然的なからだを意味する。しかし新しい意味に従えばそれはキリストの別の、新しいからだを意味しなければならない。それに対して自然のからだは一つの比喩なのである。これこそ聖書の語法に従えば、正しい、真に新しくされたことばなのであって、新しい本文は『これこそ私の真の、新しいからだである』ということになる」⁽²²⁾。ルターに取ってはこれと全く並行して、復活のからだも同じであって、同じではないのである。キリストはご自身を、(パンと葡萄酒という)終末論的世界、すなわち、新しい天と新しい地の素材としての宇宙の物素と同一化される(二ペトロ三章一三、黙示一章一また五、二コリント五章一七)。この創造的な新しい規定においてこれらの物素はキリストのからだなのである。

*Est*におけるキリストご自身のからだと物素の創造的な結び合わせの語りは新しい現実を造り出す。これをル

ターは注目すべき造語をもって「からだーパン」とか「血ー葡萄酒」と表現する。「これはもはや単純にパン竈の中のパンではなくて、からだーパンである。これは、キリストのからだと共に一つのサクラメントとなり、ひとり、ひとつのものとなっている。杯の中の葡萄酒もまた同様である。……これはもはや倉にある普通の葡萄酒ではなくて、血ー葡萄酒である。これはキリストの血と共に一つのサクラメントというものとなっているからである」⁽³⁵⁾。同様のことが洗礼についても言える。「これは神ー水である。水それ自体が他の水よりも高貴であるというのではなくて、神のことがばそこに到来しているのである」⁽³⁶⁾。この厳しい造語は、サクラメントにおいては、終末論的に言えば「そこにある」というのではなくて、予見的に現臨して、信仰にとっての新しい終末論的な現実があるのである。そこにおいてはキリストご自身がいのちのパン、等々「である」。もちろんこれらの造語は言語としては新しい現実を一体として言い表してはいない。必要に迫られて、「古い」現実の構成要素を結び合わせた形であるだけである。しかし、キリストの創造的なことばにおいて言語的に結び合わされていて、「サクラメント的一致」⁽³⁷⁾に至っている。「それらは結び合わされて、一つの全体となる。このような新しい一つのものに関する限り、それは別々のものであることを失い、一つのものとなり、一つのものであるから、人はこれをそのように呼び、語るのである」⁽³⁸⁾。(ものそれぞれの)同一性という形式的な論理が、神によって定められた、この結び合わせを「引き離す」⁽³⁹⁾代わりに、言語的には「サクラメント的な一つのもの」が固く維持されねばならない。「これを全くそのとおりにあり続けさせるならば、あなたはまたこれをひとつの全体として語らねばならない」⁽⁴⁰⁾。

ルターはここで、「提喻」という言語的・一般的な手続きを、設定辞における神の終末論的な行為の比喩、また予表として用いている。こうして一つの文章における個々のものが新しい、全体的な関連の中へと入れられ、

全体の中の一契機としてそれ自体新しいものとなるように、キリストのからだは創造的にパンと葡萄酒と共に、一体の新しいものとして結び合わされて語られる。しかもその際、これらのものはその経験的な特性を失うことなく、すなわち、それらが互いに変化したり、その実質を失うことなしに、なのである。☩は設定の定式の人間の言語として、神の創造的な語りのために、キリストのからだだと被造の物素に関して用いられて、「それらは結び合わされて、新しい一つの全体となる」⁽³⁸⁾のである。

この新しい現実を創造するものとして、サクラメントは「見えるみことば」なのであり、すなわち、身体的に経験される、終末論的なみことばである。その創造者としての力の中に既に完全に、神の現臨における、信仰者に対して約束されたいのちがある。まさにこのいのちが、サクラメント的なことば、すなわちサクラメントをサクラメントたらしめることば、みことばにおけるサクラメントとして与えられるのである。「サクラメントにおいてわれわれに、罪の赦し、いのち、救いがこのようなことばを通して与えられる。罪の赦しがあるところ、そこにはいのちも救いもあるからである」⁽³⁹⁾。キリストが自らご自身のからだと結び合わせた物素へと、ご自身を投入することをもって、神の創造的な力が被造物に対して現在のものとなり、こうして神ご自身がこれを完成させてご自身の永遠のいのちの中へと招き入れるのである。「神のみ名がそこにあつて、みことばがそのことを果たす。神のみ名があるところ、そこにまたいのちも救いもある」⁽⁴⁰⁾。こうして洗礼は「神の、救いの、実りある、恵み豊かな水と呼ばれる」⁽⁴¹⁾。こうしてサクラメント的なことばは義認のことばの具体化にはかならない。「これはいのちと救いのことばである。これを信じる者には、そのような信仰によってすべての罪が赦され、彼はいのちの子となる。このことば（設定辞）がどんなに大きく、強力であるかは語り尽くしがたい。これが福音全体の要約だからである」⁽⁴²⁾。サクラメントにおけるご自身の自己投入においてキリストはわれわれの義認を完成させ、自ら

永遠のことを地上的で終末論的なできごととし、こうしてわれわれの救いを根拠づけられる。なぜなら義認なしには罪人にとって救いはあり得ないからである。⁽⁸³⁾

* これは神学校創立百年記念として企画された三つの神学講演の一つとして二〇〇九年七月二日に日本福音ルーテル東京教会において行われた講演の原稿である。この講演のためにドイツー日本の旅費の支援をくださった日本福音ルーテル教会の姉妹教会である、ドイツのブラウンシュヴァイク福音ルーテル教会に感謝する。講演の通訳には徳善義和が当たったので、この訳も担当した。なおこの講演の主旨をサクラメント全体に関して取り上げた論述が教授の最新著 Gott im Wort: Luthers Theologie von der Sprache her. Mohr Siebeck 2010. 650 S. の第6章「サクラメントなことば」に収められている。

Joachim Ringleben 教授略歴

一九四五年生まれ、神学と哲学を学ぶ。一九七六年 神学博士、
一九八一年 教授資格取得（キール大学）
一九八四―二〇一〇年ゲッティンゲン大学神学部教授（組織神学）
主な著作

Hegels Theorie der Sünde (1977)

Aneignung. Die spekulative Theologie S. Kierkegaards (1983)

Wahrhaft aufstanden (1998)

Gott denken. Studien zur Theologie P. Tillichs (2003)

Arbeit am Gottesbegriff (2 Bände, 2004/05)

Jesus (2008)

Gott im Wort: Luthers Theologie von der Sprache her (2010)

注

- (1) Süddeutsche Zeitung, Nr. 296(1981), Beilage.
- (2) Vom Abendmahl Christi. Bekenntnis (WA 26, 261-509)『キリストの聖餐について、信仰告白』[八・二二—三三七]。以後邦訳のあるものについては、参照のため邦訳著作名を挙げ、その後「」内に、ルター著作集第一集他の巻と頁などを掲げて、相当箇所を指示する。なお、講演中の引用の今回の訳は既存の訳によつてはいない。
- (3) Gesammelte Schriften, Bd.2 (1921), 223.
- (4) 例えは『チェーリット和協』(1549)参照。
- (5) Lehrbuch der Dogmengeschichte, Bd. 3 (1910; ND 1983), 875.
- (6) Natur und Sakrament (1928), in: Gesammelte Werke, Bd. 7 (1962), 108.
- (7) 先の注一を参照。
- (8) WA 26, 337, 14 [八・一七].
- (9) AaO, 440, 16-18 [八・二二七].
- (10) Disputatio de fide infusa et acquisita, Th. 18 (WA 6, 86, 7E).
- (11) 「サクラメント」という語はルターにとっては、キリストが第一、サクラメントが第二、という位置づけをもちつた (WA 26: 407, 31f. [八・一九〇]参照)。
- (12) transsubstantiatio とは、キリスト「自己」を伝達する」「自己」を翻訳する」という意味である。
- (13) Predigien, gesammelt von J. Pollander (WA 9, 440, 9E).

- (14) Predigten (WA 10 III, 70, 28-30).
 (15) AaO, 71, 1f.
 (16) BSLK 292, 41f. [一致信条書、アウグスブルク信仰告白弁証 第三条 5]
 (17) WA 26, 296, 17f. [八・六九以下]
 (18) Sermon von dem Sakrament der Buße. WA 2, 717, 32f.
 (19) AaO, 692, 36 u. 37f.
 (20) Grund und Ursach aller Artikel WA 7, 323, 3-5. 『ロープの大勅書』によつて不当にも断罪された。マルティン・ルター博士の「サントの条項の弁明と彼の根拠」[四・一七]
 (21) Sermon von dem Sakrament des Leibes und Blutes Christi. WA 19, 504, 27f.
 (22) Vom Anbeten des Sakraments des heiligen Leichnams Christi, wider die Schwarmgeister. WA 11, 432, 24f.
 (23) BSLK 691, 38f. u. 692, 3f. u. 6. [一致信条書、大教理問答・第四部 洗礼 6]
 (24) WA 11, 432, 25f.
 (25) WA 26, 294, 30-34 [八・六九]
 (26) BSLK 708, 36-39 [一致信条書、大教理・第五部 聖壇の聖礼典 4]
 (27) Vom Mißbrauch der Messe. WA 8, 509, 37-39.
 (28) WA 26, 446, 1-3 [八・二三三]
 (29) AaO, 282, 39-283, 5 [八・五一]
 (30) Sermon von dem Sakrament des Leibes Christi, wider die Schwarmgeister. WA 19, 492, 22-24.
 (31) AaO, 492, 30-493, 8.
 (32) AaO, 491, 13-16.
 (33) Predigten. WA 10 III, 70, 28f.
 (34) BSLK 713, 38f. [一致信条書、大教理・第五部 聖壇の聖礼典 31]

- (35) AaO. 20-22 [同上]
- (36) AaO. 709, 23-25 [同上]
- (37) Sermon von dem Sakrament des Leibes und Blutes Christi: WA 19, 493, 21f.
- (38) BSLK 709, 37f. [「致信条書」大教理・第五部 聖壇の聖礼典 10]
- (39) パンがキリストのからだに「なる」のではない (WA 26, 287, 27-30 [八・六一]) し、われわれがそれをどのように「作る」
 のじゃなく (AaO. 287, 23 u. 26)。
- (40) WA 26, 440, 16f. [八・二二六]
- (41) AaO. 443, 8 [八・二三二] “unzeitig” 「未熟な」論理。
- (42) 部分をもって全体が言い表されるといふ、修辞学的な語法である。たとえば、金銭や葡萄酒をもって財布やぶどう樽全体を表すような場合である。
- (43) AaO. 443, 14-16 [八・二三二以下]
- (44) AaO. 443, 29-31 [八・二三三]
- (45) AaO. 442, 6f. [八・二二九]
- (46) AaO. 443, 31f. [八・二三三]
- (47) AaO. 382, 25-383, 3 [八・一六二以下] 参照のこと。「神が働くことをもってことを行われるように、聖書は語ることをもってことを行うからである。さて、神はいつでも、意味とかたとえとかが先ず起こり、その後で真の事柄、たとえの成就が続くように、ことをなされる。……聖書も同様に行う。すなわち、たとえである、古い言葉を取り上げて、比喩や新しい言葉を作り、真の実態である新しい意味をこれに与える。」
- (48) AaO. 272, 20-22 [八・三七]
- (49) AaO. 274, 23-25 [八・三九]
- (50) AaO. 284, 36f. [八・五五]
- (51) AaO. 380, 37-381, 20 [八・一六〇以下]

- (25) AoO. 382, 8-12 [八・一六二]
- (26) AoO. 445, 10-15 [八・二三四以下]
- (27) BSLK 693, 36-39 [「致信条書、大教理・第四部 洗礼 14」]
- (28) WA 26, 445, 8f. [八・二三四]
- (29) AoO. 445, 4-6 [八・二三四]
- (30) 参照: AoO. 444, 26 [八・二三三]
- (31) AoO. 444, 34f. [八・二三四]
- (32) AoO. 445, 4 [八・二三四]
- (33) BSLK 520, 26-30 [「致信条書、小教理・聖壇の礼典 6」]
- (34) AoO. 696, 8-13 [「致信条書、大教理・第四部 洗礼 26」]
- (35) Vom Anbeten des Sakraments des heiligen Leichnams Christi, wider die Schwarmgeister: WA 11, 432, 21-25
- (36) 参照: BSLK 992, 21f. [「致信条書、和協信条 根本宣言 第三条 52」]

(訳・徳善 義和)